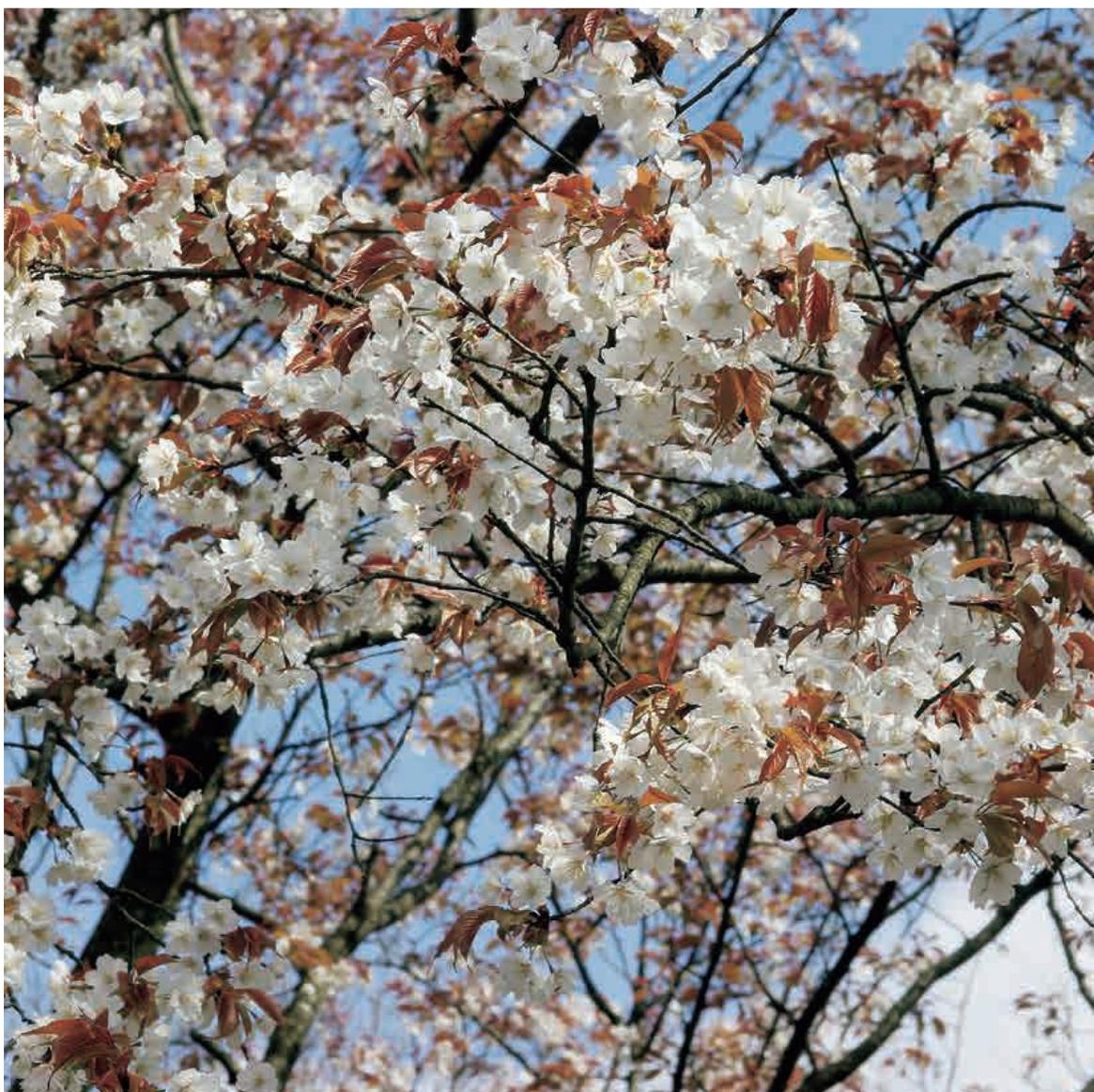


2023.3
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とよ や 富 薬

3号

第45巻
No.404



ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidzumi

(バラ科 *Rosaceae*)

生薬 オウヒ（桜皮） 夏に余り老朽化していない樹皮を剥ぎ、天日乾燥する。

成分 フラボノイド：sakuranetin, sakuranin, genkuwanin, glucogenkuwanin 等。

効能 蕁麻疹、腫れ物など皮膚病に用いる。エキスはプロチンの名で鎮咳去痰薬として配合される。華岡青洲の経験方である十味敗毒湯にも配合される。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



入学式、入社式など春の桜の花は一年の出発点と深くかかわり、四月の花というイメージが定着していますが、温暖化のためか最近では三月に開花することが多くなっています。ヤマザクラで有名な吉野の千本桜も同様です。今から約1300年前、修験道の開祖と呼ばれる役小角（役行者634-701）は、難行苦行の果てに蔵王権現を感得し、その尊像こそ濁世の民衆を救うもののだとして、桜の木に刻み、これを山上ヶ岳と吉野山に祀ったことから、桜の木は吉野山において御神木とされ、献木という行為によって植え続けられてきました。記録としては1578年に摂津平野の豪商末吉勘兵衛（1526-1607）が桜の苗一万本を寄進して以降、参詣の人々による桜の献木植樹が盛んになったと伝えられています。豊臣秀吉（1537-1598）が、徳川家康（1542-1616）など武将や

茶人、連歌師など総勢五千人を連れ、花見を行ったことはよく知られています。

ヤマザクラは日本の固有種で本州（宮城、新潟以西）・四国・九州に分布する落葉高木で、幹は紫褐色から暗褐色、褐色の皮目が目立ちます。葉と花が同時に展開し、葉は互生、長楕円形で先は尾状に尖り、縁は鋸歯になります。花期は3月中旬から4月中下旬、花は散房状に2-3個がつき、白色から淡紅色の5弁花、長い花柄を持ちます。果実は直径7-8mmの球形の核果で赤くなり、熟すと黒紫色になりますが、苦味があるためあまり食べられることはありません。個体変異が多く、花つき、花の大きさ、葉と花の開く時期、花の色の濃淡と新芽の色、樹の形など様々な変異が認められます。

他に日本自生種でサクラ属、サクラ亜属、サクラ節に分類されるサクラには本州、九州に分布する落葉小高木のチョウジザクラ (*P. apetala*)、中部、関東地方に分布する落葉小高木のマメザクラ (*P. incisa*)、本州から九州、済州島に分布する落葉高木のエドヒガン (*P. pendula* f. *ascendens*)、亜熱帯から暖帯南部の沖縄、台湾、中国・ヒマラヤに分布する落葉高木のヒカンザク (*P. cerasoides* var. *campanulata*)、北海道、本州中北部に分布する落葉小高木のミネザクラ (*P. nipponica*)、房総半島、伊豆半島、伊豆七島に分布する落葉高木のオオシマザクラ (*P. lannesiana* var. *speciosa*)、本州中部以北、北海道、樺太、朝鮮に分布する落葉高木のオオヤマザクラ (*P. sargentii*)、北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国に分布する落葉高木のカスミザクラ (*P. verecunda*) などがあります。代表的な品種にはエドヒガンとオオシマザクラとの自然交配種のソメイヨシノ (*P. × yedoensis*) があります。幕末のころに江戸の染井村で発見され、いまではサクラの代名詞となっています。樹高は約10-15m。樹形は横に大きく広がる傘状になり、老木になると太い幹が下からねじれるように横に広がります。葉は互生。葉身は楕円形で葉縁には浅い重鋸歯があります。開花期は全体的には3-4月。花弁は5枚で葉が出る前に花が開き、満開となります。花色は咲き始めは淡紅色で、満開になると白色に近づきます。エドヒガンと同じく満開時には花だけが密生して樹体全体を覆い、オオシマザクラの大きくて整った花形を併せ持った品種です。

江戸時代の本草書『本朝食鑑』（1692）の「櫻桃（佐久良乃実）」に「樹皮、主治一切の瘡毒を逐う。按ずるに此れ木工の之用いる所、俗に櫻樺と謂う者也」とあり、樹皮を「樺」と呼び薬としても用いたと記しています。『大和本草』（1709）の「樺」にも同様に「樺皮、本草にもかくの如く云えり。癰癤諸病を治す」と、『和漢三才』（1713）の「樺」には「木皮（苦平）黄疸を治す（煎じて服す）時行熱毒瘡および乳癰に良い」と排膿、解毒などに用いられたことが記されています。サクラ亜属、サクラ節に属するサクラ類はそのほとんどが日本特産と言ってもよく、その樹皮である桜皮は日本で開発された和薬と考えられ、江戸後期の『花岡青洲（1760-1835）家方』の十味敗毒湯にも解毒薬として桜皮が配合され、現在では『第十六改正日本薬局方』から「オウヒ」の名で収載され、基原植物をヤマザクラとカスミザクラとしています。

（村上守一 記）